

JA南国市出資農業生産法人 (株)南国スタイル

スゴイ農業、スゴイJA②

JA自己改革の現場から

南国スタイルの皆さん（中央が秦泉寺雅一社長）、社員は6名で、4名が農業生産事業で働く

農業を「憧れの職業」に
——(株)南国スタイル(高知県)の取り組み

JA全中広報部

JA南国市出資農業生産法人
株式会社 南国スタイル

農業をやりたくとも、農業には初期投資がかかり、二の足を踏むという人も多いもの。「就職」ということで農業をやってみて他産業並みの所得を得られるめどを立ててもらおう。そして、南国市で農業をやりたい、住みたい、と思ってもらえる……法人名の「南国スタイル」は、「南国スタイル」という新たな「就農」スタイルでもありました。



将来の独立に向け、生産に打ち込む

危機感から次の担い手を育てる 「南国スタイル」へ

JA南国市管内は、生産者数も生産量も半減——平成20年にJA高知中央会が、県下15JA管内の10年後の将来農業をシミュレーションしたところ、ショッキングな結果が出た。南国市は高知平野の中央部に位置し、農業環境は良好だが農業生産等の減少率は激しい。管内の農業の維持、発展のために、地域農業を

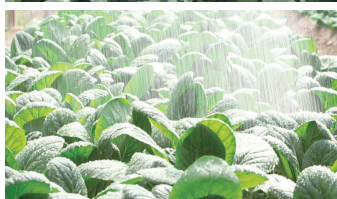
下支えするような担い手が必要ではないか、とJA南国市では考えた。

折しも平成21年に南国市役所で、厚生労働省の雇用創出事業を農業分野でという話があった。農地の借地料や農機のリース事業費、雇用者人件費まで出るということでもあり、当時JA南国市の職員だった1名の職員が派遣され、事業を開始した。

「雇用創出」が目的のため、農産物の販売はできなかったが、法人立ち上げの準備期間と



上／中村さんの就農を目指す社員へのアドバイスは「まず聞く耳を持つ」「聞いたら取りあえずのみ込む」「自分のやり方を見つけたら議論する。けんかはどんどんやれ！」だという 右上／ダイコンの収穫、調製の様子 右中・下／露地キャベツ。雨よけハウスでコマツナ、ホウレンソウ、ミズナなどを栽培



夏の主力野菜オクラ。天候に強く、夏場の収入源として生産量が多い

して2年半取り組み、事業終了後の平成24年4月に、JAの出資をメインに830万円の資本金で「南国スタイル」はスタートした。

JA南国市から派遣された職員のひとり、株式会社南国スタイルの代表取締役専務である中村文隆氏（41）にお話を伺った。南国スタイルは、地域農業が右肩下がりの中で、JA自らが法人を立ち上げて若者を雇用し、やがては地域で就農する「担い手育成」を大きな事業目的としている。

地域に根づき、「農業で食べていく」。そんな姿を法人経営で見せ、あんな仕事をしたい、と若者が憧れるような仕事をしたい、それが自分たちのスタイルだ、と中村氏は力説する。

地域に合った農業生産、 地域の求める農業生産

南国市は平たん地が多く、かつては2期作が盛んで、日照時間も長いが雨も多く降るといふ地域である。

一般に、非農家が新規就農する場合、露地野菜栽培を始めるなら1,000万円の資金、ハウス栽培では2,000万円の資金が必要といわれる。南国スタイルは、まず土地利用型の露地

野菜生産で経営が成り立つ地域農業モデルを確立しようと考えた。

露地野菜では冬はキャベツ、ダイコン、夏はオクラを中心に栽培している。キャベツは高知龍馬空港周辺の三和地区でもともと生産が盛んだったが、南国スタイルでは、冬栽培に加え、3～5月に加工用カットキャベツの生産に取り組んでいる。出荷先は関西の野菜加工会社として、また高知県園芸連経由で全農青果センター等に送られる。

ダイコンはかつて市内の野田地区を中心に25軒ほどの農家で葉タバコの裏作として作られ、地元業者が古漬けにして販売していた。しかし、ダイコン農家は激減し、最後の1軒も廃業予定となった。南国スタイルは地域の食文化を守るため、ダイコン生産を決意、廃業した高齢農家に栽培方法を教わり生産に取り組んでいる。野田地区の小学校ではダイコンの種まき、収穫体験を行う。

「つながること」で 自分たちの経営スタイルを確立

南国スタイルは平成24年の設立から6年目を迎え、創業当初の赤字を乗り越え、売り上



上／野田小学校2年生児童もダイコン作業を体験。1年後に古漬けを給食で食べる。農への関心を持たせる食農教育の取り組みだ



左・下／環境制御された次世代ハウスでパブリカ、ピーマンを栽培。雨よけハウスと合わせ70aの大型施設。温湿度、日照、その他あらゆる条件を自動で設定できる最先端施設だ



左／仕入れ販売事業は「ありがたい」と思ってもらえる事業。ユーザーのニーズをつかみ、新鮮な地元野菜を希望の形態で届ける。JA直売所等で売れない野菜を南国スタイルが引き取り、1次加工して販売することで農家の所得確保にもつながっている

げを伸ばしてきた。

中村氏の人とつながる力や学習意欲は貪欲だ。キャベツ生産のノウハウを得るため、群馬県つまごい嬬恋村のキャベツ農家に入り、数日働いた。また会合等で仲良くなった香川県や徳島県のキャベツ生産法人とは常に連絡を取り合い、ときには見に来てもらうことも。卸売業者の知り合いも多い。「経験もスキルもないから人にどんどん聞く。助けてくれる人脈をたくさんつくる」

平成28年度は多雨などの異常気象により、オクラやキャベツが思ったほど生産できず、収益は減少した。この教訓をもとに、露地栽培だけにこだわらず、雨に負けない作物も作るべきと中村氏は痛感した。その平成28年度に行政の助成事業を活用し、ピーマン、パブリカのオランダ型ハウスを導入した。こうした事業をすぐに導入できるのも、南国スタイルがさまざまな関係者と「つながる」経営を行っているからに他ならない。

「ほしい」に応え、「農業で食べていく」

そのひとつが学校給食への野菜配送である。もともと南国市は、平成9年に全国に先駆

けて地元棚田米の学校給食導入を実現、給食室に家庭用炊飯器を導入し、炊きたてご飯を子どもたちに提供する「南国方式」を生み出した。南国市教育委員会が平成16年度日本農業賞第1回食の架け橋部門において優秀賞を獲得するなど「食育」先進地域である。

米の取り組みは素晴らしいものの、野菜の地元産導入率はわずか5.5%であることを知った中村氏は、各学校への野菜配送に取り組む。また同様に病院での配食、レストランやホテルなどへの直接配送も進めた。南国スタイルの野菜だけでなく、地元農家の野菜も集めて直接届け、ユーザーの手間を省いている。また「タマネギの芯をくり抜いてほしい」といったニーズにも応え、1次加工もする。

若者は「売れるものをつくる」「地域とつながる重要性」などを働きながら体感している。独立した社員は2名で、1名は専業農家に、1名は兼業農家となった。中村氏は熱く語る。「サラリーマンの平均年収が450万円。高知県では350万円。高知県の農家1戸で186万円です。私たちは、少なくとも他産業と同じ収入が得られることを目指しています」

(写真は全て(株)南国スタイル提供)